

1924年 (大正13年) [20歳]

「辰雄日誌1924」No. 4 (2)

— 1924年1月1日～31日 —

小池辰雄

○1924年2月1日 (金)

晴。母上様から御手紙を戴く。有難く拝読した。母上のために、母上のために、僕のすべては母上のために。

○1924年2月2日 (土)

雪。一番先に起きた。戸を開けると銀世界であるのに驚いた。そして喜んだ。雪の子たる僕は喜んで登校した。田舎の雪景色は実に美である。学校のかえり、小学生数人に呼びかけられた。数学の試験問題の解を教えてくれと云うのである。教えてやって答が当たっていたので喜んで「アリガトウ」と異口同音でさけんで雀躍して帰って行つた。その無邪気と可愛らしさに僕の心は何によりも更に慰められた。彼等の美、純である。

心が次第に落ちついてきた。節分が来る。第21回の誕生日も来る。復活の期が来た。感謝である。

○1924年2月3日 (日)

晴。人生をごまかさずして、真実に生きんと欲する人々は、男らしく此の事実面に面せねばならぬ。而して一度絶望を経験して、自己を投げ出さねばならぬ。真実なる生の第一歩は罪の自覚にある。救はその後でなければ来らない。まず絶望である。然る後に信頼である。まず自己の抛棄である。然る後に新しき生命の獲得である。先ず罪人としての自己の地位を如実に認識するまで、生らしき生は未だ芽生えをだに為さないのである。——創造86頁

○1924年2月4日 (月)

晴。節分、追儺祭^{ついな}。旧暦の大晦日である。追は田舎で、豆まきの声が戸々に起こる。賑やかである。かかる習慣もまた面白い。あんまり理屈ばかりにならないで、「福は内、鬼は外」位のことを怒鳴って、からからと笑うのはよい。僕は豆を買って来て、やった。外の連中は馬鹿くさいと云う様な顔をしていた。豆を攫^{つか}んだ。始めは20粒、満20才を攫んだのである。第2回、第3回は共に21粒即ち丁度、僕の年齢だけ。幸先よしと。それを皆食べた。トラップをしたところ優秀。益々もつておめでたいと思った。人間の心はやはり担ぐ様なところがあつて、こんなことがあると何となく嬉しいものである。母上様をお笑わせしようと



思つて、御葉書を差し上げた。

夢を見た。内村先生のお家へ行つた夢を見た。日曜の集会である。しかし随分トンチンカンのものであった。兄上様は相変わらず時々、夢の中に現われる。お湯屋で自分の顔を鏡に映したとき、人の言う様に顔が長兄に似、頭が次兄に似ているのに我ながら驚いた。両兄の心に似なければ駄目だと思つた。

辰雄よ、辰雄よ、しつかりおしよと、両兄は言われる。

○1924年2月5日(火)

晴。旧の元日である。朝日を仰ぐ気分はいつも実に好い。この頃は天気がよいので、朝日と夜の星の如何に美にして清なることよ。信仰薄きものに聖霊来り給え。

○1924年2月6日(水)

晴。相変わらず暖かい。これが冬の朝かと思われるほどである。登校するのは常に8時2、3分前である。8時5分の授業に丁度間に合う位に行く。帰つて来て、5時までというものは短い。ぐずぐずしていればすぐ来てしまい、夕飯までは無為に終ることが多い。時間の利用をも少しくまくする必要がある。それには敏活を要する。それには澁刺たる意気と精力を要する。それには精神の籠もれることを要する。しかし、精神はかくても身体が弱くては駄目。これが僕の悲しむべきところ。身体の健全なるを要する。こんな身体では駄目。葡萄酒を買つて来た。明日は僕の誕生日であるというので。今日は実さんのお誕生日である。

○1924年2月7日(木)

晴、後曇。第21回誕生日。次第に神様に近づく行くこの頃は感謝である。心は次第に動かざる巖にすぎりつつある。今日で満20才となったのである。益々、神に信頼して信仰に生きんことを求めねばならぬ。未だ弱い。未だ弱い。

過ぎにし20年は何であつたかをよくよく考えて見る。そして新たに迎えられる日のために更に熟考して見る。

20才、青年の花である。前途は希望のみである。来る日も来る日も希望のみである。絶対に神にこの身を捧げ奉つて、その希望にのみ歩むべきである。己れの身を棄てて初めて生命を受け得るのである。新たに迎えられるこれからの生涯をして神の光栄のためにのみ捧げて送らしめよ。

もつともつと神に、である。神様とは最も親友となるを要する。それが最も幸福である。要するに汝の心をしずめて、心の中に宿り給う聖霊のささやきに耳を傾けねばならぬことを以て最大最重要のこととする。自分は今日、これらのことを思うがまだ深みがたりない。神様にもつと深くさせて戴かねばならぬ。今日はこれで筆を擱くとする。



未だ汝は驕慢の様である。神様は未だ僕をよしと見給わない。しかし、第21回の誕生日に当たって、神様に感謝することはこの感謝と希望の心とである。そこでペンをあらたにしてここに讃美歌のみを掲げて、今日の心を神様に申し上げましょう。

神様、神様。すべての僕の驕慢をゆるして下さい。

「なんじら忍耐て其の生命を全うせよ」(ルカ21・19)

Fasset eure Seelen mit Geduld. (Lukas xxi.19)

In your patience posses ye your souls. (St.Luke xxi.19)

われらも泉を ふかくぐぐり

くれないのつみを 皆あらはれん。

かみのこひつじの ながせるちの

きよむるちからは かぎりあらじ。

十字架ならで たのむかけなき

わびしきわれを あはれみたまへ

みすくひなくば いくるすべなし。

うつりゆく世にも かはらでたてる

主の十字架にこそ われはほこらめ。

わが身もいさみて 十字架をおひ

死にいたるまでも つかへまつらん。

母上様よ。ルーテルよ。クロンウエルよ。兄上よ。

内村先生よ。藤井先生よ。畦上先生よ。

いと小さき僕のためにもお祈り下されんことを。アーメン。

○1924年2月8日(金)

晴時々曇。附属の連中の桐水会を公会堂で催した。僕は行かなかった。会費3円と云う。贅沢な次第である。8時頃、皆、桐寮へ来て、12時までぐずぐず、だらだらとダベツて帰って行つた。附属の連中もやはりだめだ。もっとパキパキとやりたいものである。実に活気のない無駄な時間をだらだらと費やすので、実際、癪に障った。いくら桐水会でも僕はこんな金は賛成できぬ。不愉快な日だった。

○1924年2月9日(土)

晴。起床7時半。登校した。1時間授業を受けた。2時間目は休みと云うので、予定変更して10時の汽車で帰京した。午後2時の汽車で帰るつもりであったのを10時に繰り上げ得たので気持ちがよかった。

神楽坂で電車を下りて理髪屋へ寄った。本屋にも立寄った。6円と云う画で実に好いの



があった。欲しくあったがあまりに高すぎて如何ともし得ずであった。その画と云うのは、崖から落ちかかっている羔を牧者が救わんとしているところである。

お風呂へ入って夕飯をいただいた。母上様は相変わらずお元気で嬉しくあった。珍品力ニの御馳走になった。兄上も宇都宮から帰って来られた。一家揃って賑やかである。

○1924年2月10日(日)

雨。今日は終日、雨である。教会へ行かんとして行く能わず、母上も僕も今日の天気はうらまざるを得なかった。僕は柏木の今井館へ行きたいのであるが、会員でないので如何ともし得ず、聖日を家で過ごすことにした。

買物に出掛けた。丸の内ビルディングに今日のお祝いの御馳走を買いにである。それから丸善へ行ったが、本がみつからなくてそのまま帰った。大手町の衛生館も焼け落ちたままそこに雨が降っている光景はいかにも物悲しくあった。

晩は15日の姉上のお誕生と、7日の僕の誕生とを兼ねてお祝いする。5日の節分るとき、母上が豆をつかんで下さったら、僕の年も兄上の年もちゃんと攫まれたとのことで、奇しき兆、正に祥瑞であると云うので、そのおめでたい色々で今晩は御馳走であった。西洋菓子も8時頃戴いた。入浴して寝たのは9時であった。楽しい日であった。讃美歌を歌った。雨中について午後4時前、母上と平口さんの家へ行く。ずいぶんヒドイ道で難行であった。しかし母上をお伴れしてあるくほど愉快なことではない。

○1924年2月11日(月)

曇。紀元節。国旗を掲げる。今日は天気がよければ母上と散歩に出掛けようと思っていたが、曇っているので水戸へ帰ることにして、12時の汽車で帰って来た。

「かりそめなるあやまちも ほろびに入る門ぞかし」と教えられる。車中。

辰雄よ、愚かなる兒は母の憂なり。記せよ。よく神に帰れ。この度の上京、母上をお慰めし得たるか。およろこばしし得たるか。汝は未だうわきなり。

北京の兄上よ、宿り給え。僕の肉体に。辰雄よ、心の波だつとき、そのまま神に行け。神様は、その祈りに答えて、ささやきを以て教えて下さり、しずめて下さる。

それでは、12日を迎えん。すべては、やはり善である。讃美せよ、讃美せよ。

○1924年2月12日(火)

曇、雨。Lincoln's Birthday. 起きたら雨が降っていた。昨日帰水してよかったと思った。少し寒気が戻った様である。今日はリンカンの誕生日である。僕の敬愛するリンカンの誕生日である。彼の肖像を机の上にかざった。彼のために独り祝杯をあげた。丁度、白葡萄



酒があるのである。かかる人々の誕生日や記念すべき日を祝すために、好い葡萄酒を置いてその度毎に祝うのは面白いことであると独り考えておかしくなった。そうすれば高価な葡萄酒といえども、少しも贅沢なことではない。僕は強くある、と今日思った。人から何のかのと云われて動く僕ではない。人に如何にあしらわれてもそんなことを意に介する僕ではない。僕は僕自身の外に、信頼するものがある故に強くある。人を標準にしていいては動く。絶対的のものに抛りて自分を測る。それでこそ安定である。僕は強くある。非常な力が僕の身体に宿りつつある。こんな感謝なことはどこにあるか。ああ、どうしても生は基督教でなければ得られない。

リンカンも敬神の人であつた。正義の人であつた。義に飢えかわく人であつた。ホイットマンも実に然りである。同時代にこの二偉人を出だしたる米国は幸なるかなである。大統領リンカンが戦時中の或る日、大統領官舎の窓の前に立ち、ぶらぶらと徐に歩いてゐるホイットマン見てその後を見送り、振り返つて身辺に居た人々に、

「のう、あの人は男らしい様子だのう」

と言つたということである。リンカンとホイットマン。こんな人らしき人はいない。

彼のために祝祷を捧げる。今日である、しず賤が伏屋にふせや呱呱の声をあげたのは。正義のために、しかも、愛と男らしき処とを常に発露しつつ神の僕として一生を捧げしリンカンを憶うと、僕は全身に泉水をあびせらるるよりも清なる浄なる感に打たれる。

歩まんな、偉人リンカンと共に。彼は最も人らしき人である。世人が偉人々と云つて敬遠して自ら俗塵に漬かるは何たることぞ。偉人こそ、最も手近な友である。汝自分がその良心に立ちかえつて純に立ちかえるならば。

男らしきことと、愛と、正義、これをこれを飢え渴く如く求む。

○1924年2月13日 (水)

晴。感謝すべきは、神の愛である。小さく動き易きは世人の愛である。人の就眠中に隣りでわいわい騒ぐ無遠慮者が今の日本の学生か。今の日本の学生に、秩序と謙遜と礼儀を植えつけないければ危うしである。

○1924年2月14日 (木)

快晴。救の主、我が主よ。真正なる基督者たらしめたまえ。主のことを学ぶを以て、最も大切なこととなさしめ給え。

“Be” Christian [キリスト者で在る]たらしめ給え。

人より受けたり、蒙りたりする一切のこと皆、主の愛によつて之に対せしめ給え。而して真の楽しき、喜ばしき平安を与え給え。光よ、汝(僕)の求むるものは之にして、汝のあらねばならぬはまたこの光なり。



○1924年2月15日(金)

晴。体操がないので1時間早く帰った。別に書くべきことはないが、ただ感謝なるは夜の祈りである。また切実なるは母のために祈り奉ることである。

○1924年2月16日(土)

晴。今日は寒い。風が吹き荒れた。僕の心もすこし乱れた。夜の星を仰いで、やはり教えられ導かれた。センチメンタルにのみはしる世の青年よ。汝等の夢を破るときのあるときのために悲しむ。そして切に祈る。神を知らざるか、内なる霊にかえらざるか。然らば汝等の読む書は空なるを知るべし。なすことの虚なるを悟るべし。愉快とするところの真の平安と喜びをあたうるものに非ざるを知るべし。一度非運、困難に遭遇してそれに抗し得ざるに至らば如何。その時のために悲しむ。動かざるものにたよれ。永久なるものを望め。僕の心の中を打ちあけて、この感謝の心得を語ってやりたい。語っても恐らく彼等にはわかるまい。ただ僕が嘲られるばかりである。

兄上よ。僕は兄上なり。兄上、我がために死に給えり。兄上は僕に宿り給う。僕は兄上である。総て兄上の如く。兄上の如く。

Like Masami my Brother in Him. [彼(神)にある我が政美兄上の如く]

神よ、“Be” Christian [キリスト者で在る] たらしめ給え。

○1924年2月17日(日)

烈風、吹き荒れて終日、閉じこめられたが、そのため聖書の研究でよき聖日であった。お昼前、入浴して、食事したら眠くなり、午睡2時間をした。夜、床に就いたのは9時。本当の安息日であった。

○1924年2月18日(月)

晴。兄上より、青島の教会の奇麗な絵葉書を、僕の誕生のしるしに戴いた。亡き兄上のその美を称されていた教会堂である。実にいい建物である。これを机上の絵葉書ばさみに入れて飾った。今日は、マルティン・ルーテルの御許に召されたる日である。

○1924年2月19日(火)

晴。あたたかい。そろそろマントが要らなくなる。少し雨が降った。母上様から御手紙を戴いた。いつも有難く拝見する。母上様のために祈らずには生きて居られない。

○1924年2月20日(水)

晴。今年になって初めてキャッチボールをした。心の平静を得つつあるは何より感謝で



ある。

「政美は辰雄である」

との御声が強くひびくとき、僕の平安と歓喜は言わん方なしである。男らしき兄上の如く。
“Be” Christian たらんことを。切に！ 切に！

今晚は月食なので晩くまで起きている。12時に正に半蝕である。12時半に及んで全蝕。赤色を帯びた薄ぼんやりした月となった。はじめてこんな見事な月食を見た。8時頃は雨さえパラパラ降って、これは駄目だと思っていたのが意外にも煌々たる快晴の月夜となり、見事な月食皆既を見得たるは、天文学者をはじめ喜びとするところである。

○1924年2月21日 (木)

晴。帰宅後、キャッチボールをした。あまり勉強をしなかった。夕飯まではどうも出来ない。未だ、にぶい。もつと活発に敏捷に事をかたつぱしから、かたづける習慣を着けなければだめである。

○1924年2月22日 (金)

晴、曇。Washington's Birthdayである。作文、「英雄崇拜」を書く。まとまらなくて残念であった。

政美は辰雄である。辰雄は政美である。故に、僕は淋しからず、楽しきこととて此の如きはない。どこに居るとも、兄上は我と共に在ます。困つたら兄に聞けばよい。悪いこと、過ちたることをせんとしたときは、叱責せられればよい。辰雄！ とあの厳然たる声、男らしき声、Pure〔純〕なる声、Love〔愛〕に溢れる声、それは最もよき道を僕に教えて下さる神の声なのである。僕は、兄上の如く、大きく男らしくなりたい。

○1924年2月23日 (土)

晴、曇、晴。あわれなる汝の心は波立ちさわげり。ああ信仰うすきものよ。われ汝のあわれなる心のために、筆をうごかすことさえも能わず。祈りせよ。

○1924年2月24日 (日)

晴。起床8時半。聖書を読むこと30分。友来る。4人で観梅に出掛ける。心進まざれど行く。果たせる哉、梅は未だ綻びず、ただ雑踏する人のみ。酒に酔ううかれ男があちこちに。早速これですてて、桜山へ行き、清き空を仰ぎて草の上に臥すること暫し。帰寮す。

午後、『聖書の研究』を富山に貸すために行く。彼不在。残念。母なる人に初めて会った。素朴な人らしくある。

聖日にやや心の動きたるを悔ゆ。ただ祈り奉るばかりである。母上から相変わらず有難



きお手紙を戴く。明日より一週間また試み給え。鍛え給え。
汝はそれで基督者かとのこの苦しき聖語。

○1924年2月25日(月)

晴。内村先生の『宗教座談』を読んで感ずる。試験が近づいて来て、試験勉強をしなればならない。しかし、試験のための試験ばかりではなさない。

○1924年2月26日(火)

晴、風寒し。

Being Justified by Faith

〔信仰によつて義とされる〕

we have Peace with God

我らは神と共に平安を有つ

through our Lord Jesus Christ.

我らの主イエス・キリストを通して〕

○1924年2月27日(水)

曇。藤井先生の『人生の歌』を読む。かかる書はいつ読んでも「僕の本」である。愉快な書、本当に心から嬉しく思う書である。『象牙の塔を出でて』という書を友がかしてくれたから読んで見たが、それは成るほど学者の書いたものだから取り得るべき知識は示されてあり、内容も感ずるところもあるが、浅くてしょうがない。もっともつと深いところは、どうしてもかかる無信仰の宗教のない書には得られない。故に読んでいてあきがくる。

○1924年2月28日(木)

晴やや暖かし。汝はあわれなるものなり。而して、もし己れをすてて貪らざれば、汝は誠によき神の器となるを得べし。1924年、希望の年の2ヶ月は將に逝きなんとす。あわれなるは汝の心なり。悔改なり、悔改なり。画然と汝のけがれたる心を断ちて新たに生まれよ。御恵はあふるるなり。ただ汝、之を受けざるのみ。罪、之より甚だしきはなし。

○1924年2月29日(金)

曇。風は寒い。空気は乾いている。不快な天気である。試験が近づいて来た。高校の第1学年が終らんとしている。過去ありき、之を顧う、誠に多感である。現在あり、之を慮う、涙あり。将来あり、之を思う、望あり、光あり。常に主にありて生きんことを思う。

「凡てのこと感謝せよ。これキリスト・イエスに由りて神の汝等に求め給う所なり。」(テサロニケ前5・18)

「エホバは我が牧者なり、我乏しきことあらじ」(詩篇23・1)

